



## 第2分科会

### 「青年海外協力隊活動と私の人生」

●担当：榎正智、笹館宏美

●協力者：沼澤彩子（インドネシア派遣／助産師）、中村栄太（ネパール派遣／野菜栽培）、白幡祐子（ニカラグア派遣／作業療法士）、大沼文香（ニカラグア派遣／青少年活動）、長澤恒平（グアテマラ派遣／感染症対策）

※全て所属は「特定非営利活動法人山形県青年海外協力協会」

●分科会のねらい・目的：

- ・青年海外協力隊への参加動機と任国での活動内容を紹介するとともに帰国して感じたことを参加者に知ってもらう。
- ・ボランティア経験を仕事やプライベートでどの様に活かしているのか、また活かされているのか等を参加者に知ってもらう。

●参加者人数：30名

#### 1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレイク ファシリテーター： 榎正智	<p><u>アイスブレイク 1：架空の国での挨拶</u></p> <p>架空の国での挨拶を4種類紹介し、司会者の合図をもとに参加者同士が様々な順番で挨拶をして回る。（①お早うございます、②名前、③どこから来たのか、④ハイタッチ）</p> <p><u>アイスブレイク 2：言葉の意味クイズ（部屋の四隅）</u></p> <p>パネリストに、それぞれネパール語・インドネシア語で、あるフレーズを言ってもらい、その意味を参加者に四択で考えてもらう。</p> <p>（Q1：貴方は結婚していますか？ Q2 貴方の恋人の名前は何か？）</p>
パネルトーク 進行：榎正智	<p>パネリスト：沼澤彩子さん（インドネシア派遣/助産師） 中村栄太さん（ネパール派遣/野菜栽培）</p> <p>パネルトークに先立ち、司会者が JICA 青年海外協力隊と山形県青年海外協力協会の概要を簡単に紹介。</p> <p>司会者の進行のもと、以下のテーマで、パネルトーク形式で語ってもらう。</p> <p>① <u>帰国して驚いたことはありますか？（逆カルチャーショック）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沼澤：帰国直後に新宿にて昼食を取った際、パスター皿の値段が千円と高く、かつ一人で食事をしている人が多かったこと。任地では1週間（の生活費が）250円で過ごすことができ、また一人で食事をとることはなく見知らぬ人でも一緒に食べようと声をかけてくれた。</li> <li>・中村：東京でインターネットを使おうとカフェに入ったら、Wifi が無く不便な思いをしたこと。ネパールでは何処のカフェにも Wifi があったので、ネパールの方が先進的と感じる。 日本は、技術は進んでいるがテクノロジーの導入は遅れているのかも、と感じた。</li> <li>・沼澤：インドネシアでもカフェに行くと、フリーWifi が飛んでいるので、外国の人と簡単に連絡を取り合うことが出来た。（日本ではそれが難しい。）</li> </ul>



② 協力隊参加の動機は何ですか？

- ・沼澤：以前、開発途上国で医療支援をする医師の話聞いたことがきっかけ。病院に勤務し6年経った頃、「一通りの仕事が出来ようになり、こなしているという様な感覚で仕事をしてよいのか」と感じる様になっていった。  
カンボジアを旅行し、孤児院で出会った子どもたちと触れ合い、自分が育ってきた環境が当たり前ではなかったことに触発され、開発途上国の人々の為に何か出来ないかと思ったから。
- ・中村：農業分野の青年海外協力隊を多く出している大学だったが、学生当時は協力隊に興味は無く、むしろ日本の農業の方が、問題があると思い、福島で農業関連の会社に7年間勤務した。東日本大震災を機に、「人の為に働きたい」と福島に来る人と、営業職の自分とにギャップを感じ、「何か貢献したい」と思った時に協力隊を思いついた。

③ 任地の様子と活動内容について（スライド写真を交えての紹介）

- ・沼澤：任地はエビの養殖地のある田舎で、高床式の住居。活動内容は、出産で亡くなる母子の原因追及と、解決策を考えることだった。



活動の様子（左：中村氏、右：沼澤氏）

- ・中村：任地は首都からバスで2時間程の、野菜の大産地。活動内容は、（農家に対して）化学肥料や農薬使用の正しい知識を普及させることだった。

④ 配属先に実際に派遣された時、どのような様子だったか？

- ・沼澤：派遣当初は「日本人が来た！」という珍しさで騒がれ、「何だか楽しい」という雰囲気があった。しかし（措置を施すことで助かる命があることに対して）、「人が死ぬことは神様が決めること」という現地の人々の価値観と、要請を受けた側（自分）とで問題意識の差を感じた。
- ・中村：任地は何代にも渡り隊員が派遣されていたので、受け入れ側が日本人に慣れており「やりたい事をやっていいよ」と言われた。任期終了の1年前からネパールの体制が変わったことにより、配属先がなくなるかもしれないという、不安定な状況に置かれた。
- ・司会者：派遣時の要請内容が、任地に着いてみると変わっているというのは多々あり、自ら問題を見つけ活動することがある。

⑤ 具体的な活動内容と問題をどの様に乗り越えたのか（写真を交えての紹介）

- ・沼澤：任地は新生児が多く亡くなる地域。うぶ声があげられない赤ちゃんは、呼吸が始められないので、日本ではすぐに蘇生処置を行う。任地の助産師は「やったことがない。聞いたことはあるがわからない」と病院に赤ちゃんを運ぶが、その間に赤ちゃんは亡くなってしまう。最初の頃は「日本だったら…（助けられるのに）。なんで！」と葛藤があった。しかし、命を救いたいという気持ちは一緒に、相手を否定するのではなく、自分の考えを一旦壊し、インドネシアの文化・生活習慣や置かれた状況を丸ごと

受容し、コミュニケーションをとる努力を重ねた結果、信頼関係が生まれ本音で語りあえるようになった。最後には、心肺蘇生の練習も、現地の人同士で教えられる様になった。

- ・司会者：2年間という限られた時間で、「私たちが出来ること」は、私たちが帰っても現地の方々だけでできるような環境にする、ということですね。
- ・中村：住民や農家の人々とのコミュニケーションや信頼関係がないと、いくら正しい情報やデータを示しても「分かった、分かった。」と言われるだけで、納得してもらえない。そこで、会議の時は必ず時間前に行くようにしたり、農業とは関係の無い場所にも顔を出したりとしていくことによって、名前を覚えてもらうようにした。1年に1回作物を作るので、1年目には観察し、2年目にトライ（活動）をした。

⑥ 帰国した現在、何をしているのか、何を活かしているのか？

- ・沼澤：看護学生、助産学生の実習指導をしている。お産のプロセスは世界共通だが日本で出産が原因で母子が亡くなるのは少なく、世界の中でもトップレベル。その差は何かと考えると、助産師の観察力や次のケアを考えるトレーニングを受けているからだと分かった。そこで、医療従事者が育ってゆく過程を学びたいと思った。学生には、「皆さんはたまたま日本に生まれ、日本の教育を受けられるけど、十分な教育を受けることの出来ない国や地域があるよ」と話をしている。
- ・中村：福島県田村市で復興支援員として働いている。田村市は、2020年の東京オリ・パラリンピックのネパールのホストタウンとなっており、高校生に（ネパールに関する）授業をしたり高齢者にヒアリングをしたりと市の活性化の為に働いている。公務員を目指しているの、次のキャリアへの準備期間でもある。

⑦ 協力隊に参加したからこそ、広がった価値観はあったか？

- ・沼澤：雨季で助産所が床下浸水しても、皆笑顔で記念写真を撮った。「人生楽しまなきゃ損」という感覚を教わった。人生観がシンプルにそぎ落とされた。日本にいる時は、先のことや不安でしがらみでガチガチになっていたが、この命を生きている間にどう使うか、心の声に従ってやってみようと思っている。
- ・中村：これから先が不安ではあるが、協力隊に参加したことに後悔はしていない。安定した仕事への疑問は、帰国した今も感じている。会社員ではない生き方も良く型にハマらない生き方を選択しても間違いではないと思っている。
- ・司会者：最終的に大切なのは、人とのコミュニケーションや、人生を楽しむリフレッシュする心をもっていること。違う世界に行ったら、狭い世界で考えず、視野を上手に広げて生きてみよう。



協力隊経験者  
自己紹介

パネリスト以外の各協力隊経験者から職種・任国を紹介。  
・白幡 祐子さん（ニカラグア派遣/作業療法士）  
・大沼 文香さん（ニカラグア派遣/青少年活動）

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長澤 恒平さん（グアテマラ派遣/感染症対策）</li> </ul>
<p>グループトーク</p>	<p>参加者に興味のある各協力隊経験者のテーブル（6テーブル）に移動してもらう。各協力隊経験者よりそれぞれの国事情や職業ならではのエピソード、今後ボランティア経験をどう活かしたいか等を発表してもらい、その後参加者より自由に質疑応答を行った。</p> <p>*発表項目：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協力隊参加の動機</li> <li>・活動内容（良かったこと、楽しかったこと、辛かったこと、エピソード等）</li> <li>・帰国後、価値観がどう変わったか。自分自身の変化。</li> <li>・現在の仕事、なぜこの仕事を選んだのか。</li> <li>・これからの人生をどのように生きていきたいのか。</li> </ul> 
<p>全体会・まとめ</p> <p>ファシリテーター： 笹館 宏美</p>	<p><u>全体会・まとめ</u></p> <p>① <u>各グループの話の内容を、参加者代表から紹介</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ1（沼澤彩子さん/インドネシア/助産師） 写真や母子手帳・道具などを見せてもらいながら、インドネシアでの活動や食事・住居等の話を聞いた。「この村でお世話になります」という気持ちで、現地の人に助けられて活動した。</li> <li>・グループ2（中村栄太さん/ネパール/野菜栽培） カースト制が残っている中でも人々は幸せに暮らしている。ネパールでは、若者が自国の文化や宗教・習慣等を守る努力をしている。</li> <li>・グループ3（槇正智さん/バヌアツ/小学校教諭） 小学校で体育の授業を担当。スポーツ大会を企画し、それが翌年にも開催された。言葉の壁は、簡単なコトバで乗り越える。コミュニケーションを取ることで、問題発見とその解決に繋がった。日本との違いや良さを実感した。</li> <li>・グループ4（白幡祐子さん/ニカラグア/作業療法士） 作業療法士として技術を伝えるという要請だったが、実際に人と接する中で、子どもたちの自立と開発途上国ならではの事をしようと考えた。日常生活で家族がどのように障害をもつ子ども達と接していくかということ伝えるように心掛け、家族に向けた研修会を実施した。また、集団療法として園芸活動を提案し、現地にある資源を用いて導入したことで、自分が帰国した後も継続出来た。集団に伝えることの限界があったので、個々の家庭を訪問し伝えるようにしたところ、帰国後も出会った学生が自分の活動を継承してくれている。 現地人はストレートに（物事を）伝えてくる人が多いので、日本人の遠慮しがちな性格も海外では変わるかもしれない。</li> <li>・グループ5（長澤恒平さん/グアテマラ/感染症対策） シャーガス病（虫が媒介する病気）対策で派遣。シャーガス病はデング熱のように富裕層もかかる可能性のある熱帯病と違い、貧困層が多く罹患する為、政府の対策が遅れている。活動例としては、「ぬり絵」コンテストで寄生虫を媒介する虫であるサシガメを知ってもらう啓発活動を学校や村で行った。途上国では社会制度や仕組みが未発達な部分が多いため、先進国では見えづらくなっているもの（例えば生と死、ゴミの処理など）がよく見え、自分が置かれている社会を理解するのにとても役に立つと思う。世界（他の国）</li> </ul>

に目を向けることは他の国を理解することだけではなく、自国を顧みる良い機会になると思う。

・グループ6(大沼文香さん/ニカラグア/青少年活動)

中国人と間違われて、冷たくされ悲しい思いをすることもあった。共に働いた学童保育の先生達は「手本通り」を目指す、そこに行き着く過程が大事だと伝えることが難しかった。

運動会や絵画コンテストを運営した際、日本文化を取り入れて表彰式を実施。人前で表彰されるという体験が子どもたちには無かったので、皆が達成感を味わった。



② 各協力隊経験者から参加者へのメッセージ「あなたにとっての協力隊とは？」

・沼澤：命は当たり前じゃない。

健康でいられるのは、奇跡の積み重ね。

私たちは生かされている。

・中村：過去に後悔していない。

(協力隊を選んだ) 決断は間違っていない。

・槇：人生の扉を開けてくれた経験。沢山の出会いがあり、本来ならタメ口を聞けない様な

方々とも話をすることが出来る。現地でも日本でも何かしら学ぶことが出来る。

やらないで後悔しない様に。

・白幡：新たな自分を発見できる経験。

・長澤：人生のスパイス。辛くもつらくもあり、でも、それが無いと美味しくない。

・大沼：必ず明日が来るわけではない。暴動が起こり、子どもたちに挨拶が出来ないまま帰国してしまったから。今を楽しもう。



## 2. 参加者アンケート

・実際に現地での暮らし方や活動を聞くことができ、さらに青年海外協力隊への興味が深まった。助産師さんになりたいと思っているので、道具や活動風景を写真で見ることが出来てよかった。大変なことは多いと思うけれど、それ以上に達成感が得られると思った。

・途上国に対して抱いていた感情が変わりました。前から農業について興味をもっていたのですが、より学びたいと思い、それを人のために活かしたいと思いました。

・協力隊に興味があり、協力隊の活動に参加する中でどんな心構えで参加していったらよいかを考えることができませんでした。

## 3. 担当者所感

【ファシリテーター：笹館宏美（山形県青年海外協力協会）】

今年は昨年以上に中学生2名・高校生18名・大学生5名と10~20歳代の参加者が増え、新しい風と活気を感じる分科会となった。高校生の参加が多かったため、教育や医療関連のテーブルに多くの人が集まるという若干の偏りが出たが、各テーブルともに活発な質疑応答がなされた。

運営ボランティアの大学生から、「一人の協力隊経験者の話を聞くのではなく、6名全員の話聞いてみたかった」という感想も出されたので、次回はゲスト3~4名を迎えたパネルトークで、会場全体からの質疑応答という形も検討してみたい。回を重ねる毎に運営やボランティアさんの動きや協力体制がスムーズになり、充実したフォーラムになっていると思う。ありがとうございました。